



## 第22回(4月下旬号) 『いとしき妻よ、わが鳩よ』 ②悪訳編

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書に見る誤訳・悪訳を取り上げ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から選ぶ。いずれも原文で10ページに満たない短いものだから、読者も自分で訳してみても、この解説を参考に、市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

冒頭に誤りの種別と誤訳度を示したうえ、原文と邦訳、悪訳箇所を掲げます。どう間違っているのか見当をつけてから、解説を読んでください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

今回取り上げるのは、『あなたに似た人』(早川書房、田村隆一・訳)のなかの『いとしき妻よ、わが鳩よ』(MY LADY LOVE, MY DOVE)

悪訳度：\*\*\* 致命的悪訳(原文を台無しにする)  
\*\* 欠陥的悪訳(原文の理解を損なう)  
\* 愛嬌的悪訳(誤差で許される範囲)

### 『いとしき妻よ、わが鳩よ』(MY LADY LOVE, MY DOVE)

[ストーリー]

ポーシャン夫妻は、トランプが強い若いスネイプ夫妻を家に招いた。ブリッジの賭けを楽しもうというのだ。ポーシャンの妻は、若い夫婦の私生活に興味をもって、ゲストの寝室に隠しマイクを設置するよう夫に強要する。ゲームが終って、スネイプ夫妻の会話を盗聴し始めたポーシャン夫妻は仰天した。二人がトランプに強いのも当たり前、秘密の合図で互いに持ち札を知らせ合っていたのだ。

●形容詞：\*\*

In the evenings sometimes---working on her embroidery, or painting those small intricate flower pictures--- the face would tighten and glimmer with a subtle inward strength that was beautiful beyond words, and I would sit and stare at it minute after minute while pretending to read.

夕方などに、刺繍や、あの複雑な形をしているちいさな花の絵を描いているときの妻の顔ときたら、キッとひきしまつて、言葉ではあらわせないような美しさ、あの、とらえがたい内的な力をやどしてかがやいているのだ。よく私は、本を読んでいるようなふりをして、腰かけたまま、その妻の表情に見入っていたものだ。

[解説]

形容詞＋名詞1＋名詞2の場合、名詞1は名詞2に掛かり形容詞はその全体に掛かるとするのが順当。例：local drama festival(○：地元の演劇祭 ×か△：地元芝居のお祭)

「小さな花自体が複雑な形」をしているのではない。「小さくて込み入った、花の絵」→「花が細かく入り組んで描かれている小品」ととったほうがよいだろう。

(修正訳)

もつれるように咲いている花の小品

●形容詞：\*

Even now, at this moment, with that compressed acid look, the frowning forehead, the petulant curl of the nose, I had to admit that there was a majestic quality about this woman, something splendid, almost stately; and so tall she was, far taller than I ---although today, in her fifty-first year, I think one would have to call her big rather than tall.

いま、この瞬間にも、じつとこらえている気むずかしい表情、皺をよせた額、いかにも怒りっぽいツンとした鼻を見ていると、この女には、なにか素晴らしい、荘厳さといったような凛凛しさがあるとでも、言わざるを得ない。それに背も高かった、五十一歳にもなるのだが、私なんかよりずっと高いのだ。そうだな、背の高い女というより、大女と呼んだ方がふさわしいな。

[解説]

元訳ではなぜ「大女と呼んだほうがふさわしい」のかが分らない。若い頃は背の高さが目立ったが、五十一にもなると(横にも膨らんだりして)「体がでかい」という印象になっている、というユーモアではないか。いろいろとれるとしたら、エンターテイメントとしては、面白い解釈のほうがよからう。

（修正訳）

わたしなぞよりずっと背が高い。いや五十一にもなると、体全体がでかい、という感じになっているのだが。

---

●名詞：\*

One of the gardeners was coming up the drive from his lunch. I could see the roof of his cottage through the trees, and beyond it to one side, the place where the drive went out through the iron gates on the Canterbury road.

昼食をすませた庭師がひとり、車寄せを、こちらの方へと歩いて来た。木立のあいだから、庭師の小屋の屋根が見え、そのむこうの片側には車寄せがあつて、鉄の門をとおつてカンタベリー・ロードにつづいていた。

[解説]

カタカナでわかればいいが、読者に親切にしてあげたい。

（修正訳）

カンタベリー街道

---

●名詞：\*

‘It doesn’t make any difference at all.’ She was sitting very upright, staring at me with those round grey eyes, and the chin was beginning to come up high in a peculiarly contemptuous manner. ‘Don’t be such a pompous hypocrite,’ she said. ‘What on earth’s come over you?’

「なにがいったい別なんですよ」妻は、まるで棒をのんだみたいにピーンとして坐りながら、あのまんまるい灰色の眼で私を食いいるようにみつめている、さもさも軽蔑したといったふうに、彼女の頭がだんだん上をむきはじめる、「なによ、そんなに大げさに偽善者ぶるのはやめたらどうなの、いったいぜんたい、どうしたんです？」

[解説]

軽蔑のポーズが元訳ではわかりにくい。意をとらえて、訳す。

（修正訳）

鼻をツンと上向かせると

---

●名詞：\*\*

I concentrated on a tray of the lovely Vanessa cardui---the ‘painted lady’---and …  
愛蔵のバネッサ・カルデュイ---通称『化粧せる婦人』の標本箱に、私は見いていた。

[解説]

「バネッサ・カルデュイ」では何だかわからない。和名にしてやる。

(修正訳)

ヒメアカタテハ

---

●名詞：\*\*

He was handsome in a long-faced, horsy sort of way, with dark-brown eyes that seemed to be gentle and sympathetic.

彼はほそおもての美男子で、ちょっと馬のような感じだが、おとなしい、いかにもやさしそうな濃褐色の眼をしていた。

[解説]

「馬のような感じ」では「馬面」を連想して、「美男子」と矛盾する。「ほそおもて」で意は尽くしているのだから、とってはどうか。

(修正訳)

削除

---

●名詞：\*\*

We all four of us took the game seriously, which is the only way to take it, and we played silently, intently, hardly speaking at all except to bid.

四人とも真剣だった。ま、そうとしか言えないな、みんな黙りこくって、ただゲームのこ  
としか眼中になかったし、賭けるとき以外はほとんど口をきかなかった。

[解説]

既に賭けは進んでいるのだから、「賭ける時」はおかしい。これはトランプの用語で「ビッド」

(修正訳)

ビッドするとき以外は

---

● 疑問詞：\*\*\*

---

She herded us out of the room and we went upstairs, the four of us together. On the way up, there was the usual talk about breakfast and what they wanted and how they were to call the maid.

妻は、追い出すようにして、部屋から私たちをさそい出すと、四人ひとかたまりとなって、階段をあがっていった。のぼって行く途中、朝食にはなにがいいか、召使いをどう呼んでいるのかなどと、おきまりの会話がかわされた。

[解説]

be to で可能。

(修正訳)

召使を呼ぶとき、どうすればよいかと

---

● 名詞：\*

---

The little radio warmed up just in time to catch the noise of their door opening and closing again.

このちいさなラジオの加熱が、どうやらまにあって、ドアのあく音としまる音がうまく入ってきた。

[解説]

直訳的。昔のラジオなので真空管があたたまって音が出るのに時間がかかるのだ。

(修正訳)

ラジオが温まり